氏名・(本籍地)	苫米地誠一(東京都)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	乙第77号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	**平安期真言密教の研究**
論文審査委員	主査 小峰彌彦
	副査 平井宥慶
	副査 福田亮成

苫米地誠一氏 学位請求論文審査報告書

「平安期の真言密教の研究」

論文の内容の要旨

本論文の内容を概観すると,全体は大きく第一部「初期真言密教教学の形成」,第二部「平安期の真言教学と密教浄土教」という二部構成とし,第一部第二部ともに五篇の形式をとり,B5版全1243頁という大部の体裁を備えている。

第一部「初期真言密教教学の形成」は空海教学を基本とし,真言教学を教主論と成仏論を柱に幅広く考察し,加えて三昧耶戒授戒作法の問題も検討している。第一篇は「空海教学の研究―〈法身説法〉と〈即身成仏〉―」と題しこれを七章に分け検討している。まず第一章で〈法身説法〉の成立に関して大局的に論じた上で,第二章以下で『般若心経秘鍵』『声字実相義』『吽字義』や「開題類」などの文献資料を駆使し,内容的には法身説法説の展開そして即身成仏思想を六大説や速疾成仏などとの関連を含め詳細に検討している。第二篇では,「空海教学をめぐる諸問題」と題し,空海における戒や真言密教の護国思想に考究し,さらに空海撰述の問題点についても検討を加え,全体を四章にまとめている。第三篇は六章の構成をとり,特に台密の形成について論じている。具体的には「最澄の直道説」「円仁の密教教判論・教主論・成仏論」「円珍の密教思想」などを論究したものである。第四篇は七章の構成で,ここでは「三昧耶戒作法の形成と展開」について戒体を中心に検討したものである。その内容は「唐代密教に於ける菩提心戒授戒儀」「三世無障礙智戒」「三昧耶戒の成立過程」「義操の『菩提心戒本』」「日本成立の三昧耶戒儀」「円仁撰『灌頂三昧耶戒』」「徳円印信之類」について検討している。第五篇では,空海撰とされる『秘密三昧仏戒儀』が後世の成立ではないかとの疑問から,まずこの書の問題点を提示し,写本を検討し典拠を明らかにし,本書の成立過程を述べたものである。

第二部は院政期に展開した真言教学に焦点をあわせ,浄土往生信仰と密教との関連を検討している。すなわち,浄土往生信仰と係わりを持つ覚鑁・成尊・実範・明恵・頼瑜・貞慶など真言教学の形成に大きな影響を与えた人物の教理思想を検討し論述している。第一篇は覚鑁を中心にその教主観を本地法身と四種法身という問題から検討した後,覚鑁の顕教の教主論を位置づけた上で,成仏論・往生観・機根観につい

て論じている。第二篇は,「院政期の真言密教－密教浄土教をめぐって－」と題し,成尊等の人物に注目し,浄土往生思想との問題を検討している。第三篇では「興福寺の真言僧と貞慶」の項目をたて,奈良仏教との係わりを論じている。第四篇は「往生伝と密教浄土教」の篇目をたて『日本往生極楽記』『法華験記』『続本朝往生伝』などを資料に論述している。

第五篇では,「阿弥陀如来像をめぐる問題」と題し,特に紅頗梨色阿弥陀如来像を中心に,現存の阿弥陀像はもとより「次第と儀軌」「道場観」などの資料を用い考察している。加えて定尊『阿弥陀略道場観私釈』を石山寺で新たに発見した写本を翻刻し紹介し,さらに阿弥陀法の道場観の諸資料を分類し,解説を付し国訳を行っている。

審査結果の要旨

本論文は,平安期という歴史背景を設定し,この時代に展開した真言密教を大きく俯瞰し,その教理思想及び信仰にまで及ぶ諸問題を解明することを目的としたものである。本論文の特徴は,これまでそれほど扱われていなかった平安時代の密教の展開に視点を定め,加えて真言密教を宗学的に考察したのみでなく,思想・信仰などの密教の領域を,歴史学・国語学・国文学そして美術学などの手法を駆使し,新たな知見を示そうとの立場から広く考察している点にある。すなわち研究の手法が,これまでの仏教学や宗学の方法に加え学際的な視点を以て行っている。また扱う資料文献も新資料を調査発見し検討を加えるなど意欲的であるといえよう。

第一部「初期真言密教教学の形成」は,空海教学を中心とした論考である。第一篇は法身説法と即身成仏をキーワードに真言密教の教理思想と信仰の問題を歴史的背景の中で明らかにすることを目指し,第二篇は第一篇を補説する形でさらなる考察がなされている。筆者も自覚していることでもあるが,空海の十住心思想に触れられていない点は真言密教が主題であるだけに惜しまれる。また曼荼羅思想にも何らかの形で論究が欲しいところである。しかしそれ以外の論述は,扱った文献資料を確実に精査し充分な検討を施し,筆者の一応の目的は達成されていて,従来の教学研究に対し新たな提示をしたと言うことができる。第三篇は台密に論究したもので,具体的には空海の即身成仏説と最澄の直道説との比較検討を行い,その成果は先学の勝又博士の研究を一歩進めたものと評価できる。次いで円仁の教判論・教主論・成仏論にふれ,さらに円珍の密教思想を考察し天台における密教思想を検討したことは,当時の密教を考察する上で充分意味があるといえよう。第四・第五篇は密教における戒の問題を第一章「唐代密教に於ける菩提心戒授戒儀について」を前提とし,様々な関係資料を精査し論考を加えた成果は本論文の特徴でもあるといえよう。また『秘密三昧耶仏戒儀』を取り上げた論究は筆者の新たな知見が感じられるものであり,加えて新資料の翻刻と考察は今後の密教研究に示唆を与えるものということができる。

第二部「平安期の真言教学と密教浄土教」は空海以降の真言教学を信仰問題も含め,深く係わる人物と浄土思想をキーワードに幅広く検討している。第一篇は興教大師覚鑁の教学,中でも教主観・成仏論・往生観・機根観を取り上げ考察している。筆者は既に『興教大師覚鑁聖人年譜』を刊行し,これを踏まえての覚鑁研究となっている。第二篇は院政期の真言密教を,特に密教浄土教を中心課題に論を展開している。これまでの覚鑁の浄土思想などの論文の手法は,『五輪九字明秘密釈』『阿弥陀秘釈』などの著作から演繹的になされているものが多いが,筆者は密教浄土教と言い切った視点から新たな局面を見出そうとしている点が大きな特徴である。すなわち密教浄土教という視点から,成尊・実範・高弁・頼瑜等の真言関係の人物のみならず南都の貞慶をも範疇にいれ,さらに往生伝類を駆使しての考察は,当論文の一つの成果と

いえよう。加えて第五篇「阿弥陀如来像をめぐる問題」は , 密教浄土教の本尊としての紅頗梨色阿弥陀如来像に対し , 次第や儀軌などの事相関係の資料をも扱っての考察である。仏像をただ美術的に考察するのではなく , 道場観などの事相とからむ別な視点からの検討は。新たな試みと評価できるものである。

以上 , 本論文の特色を挙げつつ考査したわけであるが , 全体としては優れた内容であるが , それぞれの章における内容には若干の強弱があることは否めない。しかしそれは本論の研究領域が極めて広範であり取り扱うべきことが多かったためと考えられるので , いたしかたないものと思われる。ただ , 本研究が即身成仏・法身説法という悟りの世界の極めて事相的な問題と , 信仰という現実世界の問題という全く観点が異なる分野であるため , 筆者なりの方法論を提示する章が必要ではなかったかと考えるものである。もちろん「序」において言及されてはいるのだが , これだけの大論であることからすれば , 論じ足りない印象は免れない。しかし , 以上のような多少の問題点は指摘できるが , 本研究は論文の体裁・内容とも整えられており , また詳細な註も施し , 加えて積極的に新分野を開拓し新たな見解を提示している姿勢は大いに評価できるところである。それ故 , 当論文は博士論文としての充分な内容を有するものと判断するものである。